

L.M. モンゴメリ作品における家事能力と女性中心社会

Housework skills and woman-centered society in L.M.Montgomery's works

土 屋 志 織*
Shiori TSUCHIYA

日本女子大学大学院紀要
家政学研究科・人間生活学研究科
第 23 号

L.M. モンゴメリ作品における家事能力と女性中心社会

Housework skills and woman-centered society in L.M.Montgomery's works

土屋 志織*

Shiori TSUCHIYA

Abstract This study aims to investigate the power of women who take charge of housework in L. M. Montgomery's works. Her novels were set in villages where women wield power; men work on their farms, while women build social relationships in the village. There is a unique sense of gender values different from those in urban districts. This study pays special attention to Susan Baker in the Anne series, and Judy Plum in the Pat series.

Despite being servants, fame comes to those who can keep the house perfectly. Moreover, they can control the family by making good food. People cannot defy them without jeopardizing their high quality of life. In these novels, if one can acquire excellent housework skills, one can also obtain power transcending their class and become the top of the household, even the top of village society.

Key words: L.M.Montgomery L.M. モンゴメリ, Servant 使用人, Mistress 女主人, Housework 家事, Gender ジェンダー

はじめに

モンゴメリは、1880年～1900年代のカナダのプリンス・エドワード島を舞台に、多くの家庭小説を書いた作家である。彼女の作品には、カナダの村の当時の日常生活が、リアルに再現されているが、一つの興味深い事象が見出される。それは、家庭内で主人と言われる立場の人物よりも、家事一切を担当する使用人という立場の人物が、脇役ながらも主人公を支える重要な役割を持つ、ということである。

彼女たちは、一応は女主人によって統括され、家事を切り盛りする家事使用人という立場であり、家族の一員ではない。しかし、作品内で実質的に家庭内を牛耳ることのできる権力を与えられている。その権力源となるのが、料理をはじめとした家事能力である。ほとんどが自給自足でまかなわれていたこの時代、おいしく栄養のある食事を摂り、質の高い

生活を送ることができるか否かは、料理人の腕にかかっていた。だから、たとえ料理人が階級としては下の立場にあったとしても、その人物に逆らうことは、自身の生活の質を落とすことにつながりかねない。実際に、料理人の機嫌を損ねたために、夜食を食べられなかったと悔しがる登場人物の姿も描かれている。そのため、自然に台所を統治する人物は家庭内で実質的な強い権力を握ることとなり、作品内では女主人との立場が転覆している様子も描かれる。

また、モンゴメリの作品では、都市の中産階級のジェンダー役割とはやや違い、男性が自分の農場で仕事をし、女性が組織化された地域社会で家庭を代表した社交関係を築くという場合が多い。そうすると、村は女性が社会を司るという共同体となり、独特のジェンダー役割が見られる世界が作品の舞台となっている。ここでは、家庭内で料理をする人物の腕がその家庭の評価を築き上げ、本人も使用人の立場でありながら地域社会で十分な尊敬を集めることができるのである。本稿では、モンゴメリ作品のバットシリーズ、アンシリーズに登場するそれぞれの使

* 日本女子大学大学院 人間生活学研究科 人間発達学専攻 (博士課程後期)
Division of Human Development, Graduate School of Human Life Science, Japan Women's University

用人, ジュディ・ブラムとスーザン・ベーカーを中心に注目し, 家事の腕一本で階級をも超えた評価を得ることができるこの共同体の独自性について考察する。

1. 台所が示すもの

モンゴメリの作品においては, ケーキやパイなどの料理名が多く登場し, それらが作品内で重要な役割を担うエピソードであることが多々ある。例えば代表作である『赤毛のアン』(Anne of Green Gables, 1908)では, いちご水だと信じてダイアナに振る舞った飲み物が実はぶどう酒だったというエピソードで, ダイアナを故意に酔っぱらわせたと思じた彼女の母親から今後一切の交際を拒否されてしまう。新任の牧師夫妻のために心を込めて作ったケーキに, 香りづけのバニラの代わりに痛み止めを入れてしまったエピソードでは, この先いつまでも後ろ指を指され続けることになる失敗だと絶望する。これらはどれも, 主人公アンのおっちょこちょいな性質を読者に示すものであるが, 同時に食べ物・料理がその人物の社会的な評価に密接に関わっていることを示していることもわかる。

なぜそれらが社会的な評価に結びつくのか。当時は自給自足が家庭の基本の生活であり, 既製品は貴重なものであった。男性は自らの農場で仕事をし, 女性はそれを手伝いつつ料理, 洗濯, 裁縫などの家事を行っていた。現代において女性が家事の一環として料理をすることと, モンゴメリ作品世界において女性が食事を用意することは, その仕事のもつ意味合いが違う。家事は現代に比べてはるかに重労働であり, 料理に関して言えば, 井戸から水を汲み, 薪を運び, ストープを温めることから始まるのだ。下ごしらえをし, ストープの中に差し入れた手に伝わる温度でその料理の適温を見極めなければならず, 時間と手間, そして経験と勘が必要とされるものだったのである。そのため, 毎日の家事をこなすことは, 今よりもはるかに主婦の手腕が問われるものである。

美味しい料理を作れることは, 一家の生活の質を高める。そして, 質の高い生活を送る家庭は, 地域社会において一目おかれ, 尊敬を集めることにつながっている。アンが料理に関する失敗を大げさに悩むのは, その大仰な言葉遣いが読者を面白がらせる

という効果を狙ったもの, というばかりではない。それが当時の価値観において様々な意味を含有する失敗であり, 狭い村社会では, 噂が瞬く間に広がり, 長い間の語り草になるからである。Christiana R. Salah は, “To these small town ladies, excellence in cooking, quilting, and other “women’s work” is as important a status symbol as carriages and servants were to their London Counterparts.”¹⁾と述べている。つまり, この当時の村社会において, 実質的な女性の地位を高めるのは, 美しい着物や美貌, 立派な屋敷や財産ではなく, 家事の能力なのである。

女主人は, 実際に自身が台所に立って料理をする場合もあるが, 多くは使用人に指示を出し, 仕事を統括する立場にある。一般的な家庭では, 家事を担当する使用人が一人置かれている程度であり, 同時代のイギリス中産階級以上の家庭のように, 家事使用人の人数の多さがそのままステータスの高さにつながるという環境ではない。一人の使用人をいかにうまく使い, 協力して家を切り盛りするかなのである。つまり, 女主人にとって, 上等な腕を持つ使用人をおいておくことは, その家庭のステータスの高さを示すこと, そしてうまく家を切り盛りしている女主人としての手腕を周囲に示すことができるのである。それは逆の場合も然りであり, 使用人が女主人を尊敬しない, 指示に従わない, 家事が得意でないなどの場合において, その人物を統括する女主人と家庭の評価を揺らがせることもできるのだ。

2. 女主人との関係性

本稿で扱う, アンシリーズのスーザン・ベーカーと, 『銀の森のпат』(Pat of Silver Bush, 1932)シリーズのジュディ・ブラムの場合はどうだろうか。

スーザンは, アンが『アンの夢の家』(Anne’s House of Dreams, 1917)において第一子を出産する際, お手伝いとして雇われた中年女性である。彼女はすぐにアンを崇拜し始め, ブライス家の台所を統治し, シリーズの終わりに至るまで物語に欠かせない人物となる。アンははじめ, 夢の家の主婦として台所に立って自ら料理をしており, その様子は家事に厳しいリンド夫人も納得する腕前であった。そのため, 産後もスーザンを家におこうというギルバートの意見に反対する。スーザンを居残らせることは, 台所を統治する権限を彼女に明け渡すこと

になる。彼女は自分がある限り、大切な「先生の奥さん」に仕事をさせるわけにはいかないと考えているからだ。それはつまり、主婦として実質的な家事一切を任せ、彼女はそれに直接手を下さず、統括する立場に移行することである。結果的にアンは、彼女の体調を心配した夫で医師のギルバートの意見により、スーザンを受け入れる。このことにより、アンは家庭の主婦から、使用人を使う「女主人」へと立場を変えるのだ。二人の立場には雇い主と雇われ人という明確な差があるが、心から自分を崇拜するスーザンにアンも信頼を寄せ、精神的に対等な関係を築いていく。

ジュディは、銀の森屋敷に古くから住み込みで働く料理人だ。短いごま塩頭の中年女性で、アイルランドなまりの言葉話す。使用人ではあるが、主人であるパットの父、アレック・ガードナーよりも長く屋敷におり、一族の歴史を眺めてきている。アイルランドの伝説や昔話、そして村中の噂話を知っており、それを子どもたちに語り聞かせる。家の切り盛りに関しては、アレックも女主人であるメアリにも、誰にも口をはさませない上に、新たに生まれた赤ん坊の名付けに意見することができるほどの発言権を持っている。メアリも、アレックの妻として銀の森屋敷にやってきた娘時代からの関係性があり、ジュディを大変頼りにしている。二人は精神的に対等、あるいはジュディの方が屋敷における実質的権限は大きいと考えられる。

そんな女主人と台所の主の力関係は、子ども達の存在を介した関係性によって明確になる。母親であり、「奥さん」である女主人と台所の主は、子どもたちの視点での描かれ方に、はっきりとした相違がみられるためである。子ども達にとって母親は崇拜すべき憧れの存在である。か弱くはかないイメージを与えられることが多いが、心は雄々しい、子ども達の精神面での成長を支える役割を担っている。子どもたちにとって母親の言葉は、女神からの言葉のように響いている。

一方、食事を与え、着替えさせ、あたたかくベッドを整えて眠らせるなど、日々の生活において必要な実質的な世話をするのは、台所の主であることが多い。彼女たちは母親のように、美しく崇高に描かれることはなく、おしゃべりで、大股で力強く家中を統治する。それは決して女神の様相ではない。しかし、空腹でひどい状態で家に帰り着いたとき、体

を拭いて着替えさせ、食事をあたえてくれる彼女のあたたかな存在は、「我が家への帰還」を象徴する。美しいとは言えない彼女たちの優しさに、子ども達はほっと心を安らげるのだ。彼らは母親とは別種の、育ての親としての愛情と信頼を、台所の主に抱いている。母親の助言を求めるとき、台所の主に身体的な満足感を求めるとき、と必要に合わせて相手を選んでいるのである。

ひとつ例を挙げてみよう。アンシリーズのブライズ家の末っ子リラが、子どもらしい間違った思い込みから、お菓子を持って外を歩くことは恥ずかしいことであると考えていたエピソードである。リラはスーザンから教会へ持って行くように頼まれた美しいケーキを、道で憧れの先生に会った瞬間、恥ずかしさから川へ投げ捨ててごまかしてしまうのである。それが間違いであると気づいたリラは、気に病んでスーザンに告白をする。それを受けて驚き呆れたスーザンは、ちょうどその場に現れたアンに対し「やれやれ」と思いながら、退却するのである。そして母が娘の複雑な懺悔を聞いて、慰め諭したあとにスーザンはもう一度現れ、菓子パンで元気づける。スーザンが一番にリラの異変に気づき、母親であるアンが精神的な助言と安定をリラに与えた後、再びスーザンがより現実的な方法でそれを後押しする。暗黙の了解のように互いの役割を理解し、家庭内でそれぞれの存在を認めているのである。

しかし、日常的に子ども達が必要とする場面が多いのは、圧倒的にスーザンの受け持つ分野に関するものだ。シリーズ中盤以降、母親となったアンは物語の主人公の座を子ども達に譲り、幼い頃のアンを彷彿とさせるような、彼らのおかしな失敗と成長のエピソードが続く。そして服を泥だらけにし、破き、腹を空かせ、次々と問題を引き起こす彼らが救いを求めるのはスーザンなのである。

子ども達が自由に動き回れるように、アンとギルバートの夫妻は著者によってことあるごとに町へと出掛けさせられ、両親の不在という状況が作り出されている。スーザンは大人であるが、親ではない。日常的で現実的な世話を焼いてくれるスーザンは、子ども達にとって欠かせない存在となっていく。そうして作り出されるのが、スーザンの王国である。『虹の谷のアン』(Rainbow Valley, 1919)において、

“Ingleside was her world and in it she reigned supreme.

Even Anne seldom questioned her decisions, much to the disgust of Mrs. Rachel Lynde of Green Gables, who gloomily told Anne, whenever she visited Four Winds, that she was letting Susan get to be entirely too much of a boss and would live to rue it.²⁾

と、リンド夫人が炉辺荘の主導権が奪われてしまうことを懸念するほどである。スーザンは、家庭内の家事一切を担い、子ども達の世話をすることで、台所のみならず、炉端でもアンを凌駕した家族を支配する力を獲得する。そして、結果的に女主人との実質的な力関係を転覆させているのだ。子ども達がスーザンを必要とすればするほど、彼女の権限は大きくなるのだと考えられる。そしてアンでさえも、“Susan is such a duck . . . I can't imagine what I'd do without her.³⁾”と話すのだ。実際、スーザンは夜勤で出ているギルバートを除き、自分の監督下にあるものはみなベッドにおさまっていることに満足しているのである。

子どもに対する影響力の大きさが著しく逆転しているのは、スーザンと三男シャーリーとの関係である。シャーリーはアンが産後の体調が長く戻らなかったために、生まれてすぐの状態からスーザンが母親代わりに育てた秘蔵っ子だ。ギルバートが“Dr. Blythe had said that but for her he would never have lived⁴⁾”と語る少年である。“the little brown boy”で通っているシャーリーを寝かしつけるのはスーザンの仕事であり、特別の場合でなければアンが寝かしつけることは許されない。アンが親友ダイアナに「スーザンはシャーリーを自分の子どもだと思っているにちがいない」と笑いながら話す場面があるが、これは二人にとって冗談ではないということが、のちになってわかる。第一次世界大戦に突入した時代の『アンの娘リラ』(Rilla of Ingleside, 1921)において、長男ジェムが入隊し、次男ウォルターも旅立ち、ついにシャーリーが航空隊に入隊したことを知ったことである。スーザンは、アンに向かって“Jem and Walter were yours but Shirley is mine.⁵⁾”と、母親として息子を戦地へ送り出す苦悩について語るのだ。そして出征の際、シャーリーもスーザンを「母さん」と呼び、別れの挨拶をするのである。

スーザンとシャーリーの間には実の親子以上の絆があり、そこにはアンも入り込むことはできない。アンは女主人としての最低限の権利を保ちつつも、

シャーリーに関してはスーザンに母親の座を譲ってしまっているのである。また、戦地から手紙を寄越したジェムは、スーザンの「猿の顔」の形のクッキーが一焼き手に入るなら、1年分の給料を棒に振ってもいいと言う。遠い戦地から思いを寄せる「我が家」の象徴として、スーザンの料理があるのだ。それは、スーザンが自身の腕で勝ち取った強い影響力の賜物であると言えるだろう。

3. ヒロインと台所の主

次に、子ども時代から娘時代へと突入し、ヒロインと台所の主との変化していく関係性について考察する。パットシリーズのヒロイン、パットは、幼い頃はブライス家の子供達と同様に、母親と違う側面の愛情をジュディに求めていた。しかし、成長するにしたがい、パットは病弱な母の代わりを務めていくことになる。そうなる、パットは子どもとしてではなく、女主人としてジュディとの関係を深めていくことになるのである。ブライス家の末娘リラとスーザンの関係も、同様の変化をたどる。子ども時代から密接な関係を築いてきたヒロインは、台所の主と、成長して実質的な女主人となってからのち、より深い関係で結ばれる。それは、両者で力を合わせて一つの家庭を切り回し、守っていくという目的のもとである。どちらも作品内で印象的に描かれるのは、母親は存在していても、実質的な女主人としての権限は成長したヒロインに移行しているということである。母親は、精神的に家族を支える役割に徹することとなり、表舞台から降りるのである。特に、パットははっきりとジュディから“it's ye are the mistress here now⁶⁾”と宣言を受けている。

スーザンとリラの場合は、『アンの娘リラ』の序盤では確実にアンが持っていた女主人としての権限が、徐々にリラに移行している。パットのように明確な宣言を受けたわけではないが、赤十字少女団を率いて、孤児の赤ん坊の世話も板についてきた頃から、リラは確実な成長を見せ始める。それと反比例するように、戦争に次々と息子を送り出す母親としての苦しみに打ちのめされたことで、アンは作品内で発言することすら極端に減っていく。

リラはスーザンに自ら料理を習うようになり、次第にスーザンとともに炉辺荘を取り仕切るようになっていく。アンはスーザンの“Have a good time

and do not worry about the pantry. Susan is at the helm.⁷⁾ の言葉を受けて、家庭内の切り盛りを完全に預け、パットの母メアリと同じく女主人の座を降りるのである。ジュディがパットに女主人としての権限を授けたように、スーザンはアンに引導を渡したともとれる。これは、前述した言葉通り、炉辺荘は囚らずもスーザンをボスにしてしまったのだと言えるだろう。

ここで注目したいのは、スーザンやジュディら台所の主には、体の動く限り、あるいは自分よりも仕事ができ、家族に愛される人物が現れない限り、その座が確立されていることだ。その一方で、女主人は遅かれ早かれ娘への権限の移行が待っている。そのため、ジュディは何世代もの女主人とともに、銀の森屋敷を切り回し、守っていくことができたのである。しかしそれは、替わりのものが現れた途端に脅かされる立場であることも示している。そのために、彼女達は自身の領地としての台所を非常に重要視しているのだ。ジュディは、新たな雇い人ティリタックがやってきた時、自分の寝室を明け渡すことになるのではないかという不安を抱えていた。たとえばそこに四十年間暮らし続けていたとしても、主人の一言で居場所を失う可能性のある立場であることを理解しているのだ。だからこそ彼女達は、自分の台所に干渉する他者を敵とみなし、領地を守ろうとするのである。女主人は、その座を引いても、家族の一員として重要なポジションであり、精神的な影響力を与え続けることには変わりがない。むしろ、日常的な雑事から離れたことで、その方面ではより発言力を強めると言ってもいいだろう。しかし、台所の主達はその立場を明け渡すことによって、居場所、存在意義を見失ってしまうのである。台所という場所、そして家事の腕一本に、自分の握ることのできる権限や存在意義がかかっているのだと言える。

4. 地域社会における力

ここまで述べてきたように、美味しい料理を作り、家を高いレベルで維持できる人物は、たとえ使用人という立場であっても強い権限を握ることができる。そして、教区の集まり、婦人会などで密接な組織を築いている女性中心の村社会においては、家庭内のみならず尊敬を集めることができる。家庭の評

価が、主婦の家事能力や地域社会への貢献度によって測られるのだ。

アンシリーズのレイチェル・リンド夫人は、アヴォンリー村でその主婦としての手腕を、最も高く評価されている人物である。その評価の基準とされているのが、彼女が裁縫の集いの中心であり、日曜学校の経営を行い、外国伝道婦人講演会の重鎮である上に、何時間も木綿の刺し子布団を刺し続けるといった常人離れした高い家事の能力だ。教会のバザーや孤児向けの懇親会、お針の会など、組織化された社会生活を送る主婦たちは、その手腕によりヒエラルキーが構成されている。彼女達は一家の代表として地域の催しに参加するため、そこでの地位がそのままその家庭の社会的地位となるのだ。彼女たちの夫は「だれそれのご亭主」などと呼ばれ、個性や卓越した才能、あるいは欠点などとは無縁のものとして描かれている。その姿は、仕事を通じて社会とつながるという、現代の一般的な男性像とはまったく違っている。それぞれの農場の中で仕事をするため、社交に関しては女性が中心となるのである。そのため、主婦たちが夫の職業に依ることのない、純粹な個々の能力によって認められることができる世界が構成される。横川寿美子はそのような点において、アヴォンリーは女性のユートピアであると述べている⁸⁾。

カナダで最初的女性による伝道教会は、プリンス・エドワード島の女性たちによって設立されている。モンゴメリは、実際のプリンス・エドワード島での発展した女性中心社会をもとにして、実際に存在したであろう権力関係を描いているのだ。菱田信彦は『快読赤毛のアン』(2014)において、女性が牧師になれないという時代性について嘆くアンの「婦人会に頼まなければならぬできない」という発言から、「正式に牧師や長老になることはできなくとも、教会組織、ひいては地域社会を動かしているのは実質的には女性である、というモンゴメリの自負を見てとることができ⁹⁾」と述べている。

モンゴメリは結婚して牧師夫人となったあと、教区の催す行事を率い、積極的に地域社会に貢献してきている。当時はすでに鳥を出てしまっているが、彼女がこなさなければならなかった社会的役割の重さは、日記などから垣間見ることができる。そのような場での振る舞いがどのような影響を及ぼすかを、身を持って知っていただろう。

Margaret Anne Doody は、モンゴメリ世界の女性の仕事について、“for Montgomery sees in the work that women do – including needlework – an opportunity to make an impact on one’s environment instead of being the victim of an environment wholly imposed from without.¹⁰⁾”と、述べている。一見ネガティブな要素ともとれる、果てのない家庭の仕事を、自分の影響力を高める要因として積極的に利用する。それが、当該作品群における女性たちの強さの特徴であると言えるだろう。そしてそれらの仕事における優秀さは、家庭内のみにとどまらず、男性たちも含んだ村の政治にまで影響を及ぼしている。

リンド夫人が、何もかも品質が落ちている昨今、よいふくらし粉がなかなか手に入らないことを政府が取り上げるべきだとアンにこぼすエピソードがある。それは例え冗談のつもりであったとしても、リンド夫人がここまで大義なものとして扱うのにふさわしい、本来の目的以上の権力的な意味がお菓子作りに与えられているということなのだ。

そんな社会において、スーザンとジュディがそれぞれの家庭にもたらす評価は全く違う。スーザンは、その料理の腕前で村社会に積極的に貢献し、立派に「社会人」としての務めを果たすことで、使用人の立場でありつつもグレン・セント・メアリーで確固たる地位を築いている。例えば、シャーロットタウンの共進会において、スーザンはクロセ編みのレースで一等賞をとっている。これは1827年に始まった農業会から続く長い歴史のあるものだ。ここで認められたレースをあしらったエブロンをつけ、スーザンは自信満々に婦人達を案内する。そして、腕によりをかけた料理でもてなしたことで、炬辺荘でのお針の会は “It was just like a picture you’d seen in a magazine¹¹⁾” と評価を得るのである。つまり、スーザンの功績が、そのままブライス家の評価につながっているのだ。

また、当時「レシピの交換」という文化には女性をコミュニティに根付かせる力があつた。英国由来のレシピを持っている一族は、初期入植者としての箔をつけることができるし、有名なそのレシピを譲り受けることは、その土地の重鎮に認められることでもあるというエピソードも存在する。そしてまた単純に、スーザンのような使用人の立場であっても、おいしい料理を作れる人物は、レシピと交換に周囲の尊敬を得ることができたのである。スーザン

が作った料理のレシピを求めることは、スーザン本人と女主人アン、そしてブライス家を認めざるをえないのだ。

それに比べ、パットシリーズにおいてはそのような女性たちの「社交界」の様子が描かれる場面が非常に少ない。親戚同士の家の行き来や、結婚式やクリスマスパーティーの様子は描かれているが、組織化されたノース・グレン村の会合等に出席している描写は、ほとんど描かれていない。銀の森屋敷で婦人会が開かれた際には、パットが新しく見つけたレシピで料理をふるまうということが、わずかに言及されている程度である。狭い村社会の中、全く地域社会とかかわらずに生活していくことは困難である。アンシリーズに比べてそれら描写が少ないことは、銀の森屋敷の登場人物たちが、そこにスーザンほどの関心を注いでいないということになるのだろう。パットやジュディの料理は、スーザンのように村でセンセーションを巻き起こすことはなく、“there never had been a fruit cake to match it at Silver Bush.¹²⁾” など、あくまでも屋敷内での評価に重きをおいて描かれている。

村では工場でまともなチーズを作ることになるが、そんな中でも唯一チーズを農場で手作りしている銀の森屋敷は「ひどく古めかしい」と噂されている。周囲に親しく付き合う家庭もない。変化を嫌うパットを筆頭に、村の流れに合わせることをしない銀の森屋敷のガードナー家は、アンシリーズでは当然のように存在している女性社会のヒエラルキーから除外されていると言えよう。

また、スーザンやブライス家の隣人ミス・コーネリア、リンド夫人が孤児や異教徒のため、村じゅうで生まれるよその赤ん坊のために、手を休めることなく何かを作り続けるのに対して、ジュディは銀の森屋敷のためだけにしか仕事をしない。昔ながらのフックト・ラグが観光客の気に入る、ぜひ買いたいと言われたときでも、“Judy would never sell one. They were for the house at Silver Bush and no other.¹³⁾” と断るのである。

ブライス家に比べ、銀の森屋敷が暗に「古くさい」と噂されることや、パットが「浮世離れしている」と哀れまれるなど、ガードナー家がややマイナスの評価を受けることが多い一因は、体の弱い母メアリも、ジュディも、ノース・グレンの充実した社会生活に積極的に参加していないことであるとも考えら

れる。スーザンやミス・コーネリアは“the woman whose hands were employed always had the advantage over the woman whose hands were not.¹⁴⁾”という信念のもと、他愛のない世間話の間にも、相手に自分の裁縫仕事を見せつけ合う。仕事をする姿を他者に見せることは、自分たちの生活に余裕があること、能力が高いことを見せつけ合うことでもある。ブライス家の者がどんな場であっても丁重に扱われ、尊敬を集めるのは、家長であるギルバートが医師であるというだけではなく、スーザンが畑苧荘代表の「社会人」として外に出て、高い評価を受けているということが加味されているのだ。

使用人は通常、表舞台に上がり、個人として社会で評価を得ることはない。しかし、女性が中心となり、個々の能力で認められる社会を形成している中では、台所を武器として得た権力は、仕えている家庭の評価を左右し、自分より上の階級の人間の評価さえ操ることができると言えるのではないか。当時、一般的に女性が受け持ってきた仕事は、その腕一本でその女性の優秀性を示し、周りを操る能力とつながることは、使用人、女主人、一家の主婦という階級の垣根を超える強大な武器となるのである。

おわりに

ここまで、モンゴメリ作品においては女性の力が非常に強く、その力の源に料理をはじめとした家事能力の高さがあることを考察してきた。スーザンやジュディのみならず、台所に立つ女性たちは、自己犠牲を是とし、家族のために家庭の天使として献身的に働く、古いヴィクトリア調的価値観に見合う「家庭の天使」として描かれているのではない。一見周囲から押し付けられているように見える家庭の仕事を、自分の存在を誇示する力として積極的に利用しているのである。彼女たちには、自分を犠牲にして働いた末の見返りとして幸福が用意されているのではなく、主張し、自分を周囲に認めさせ、自分の力で幸福をつかむ力があるのだ。さらに言えば、家庭の仕事で力を振るうことそのものに、幸せを見出しているのだ。

また、家庭の天使の影響力が、家族に対する精神的なものに限られていたのに対し、彼女たちは生きるために欠かせない人間の根源的な欲求を支配し、家庭の外側の公的な政治をも動かす力を持っている。

る。ヴィクトリア朝的価値観の残るこの時代、男性が家庭の内外両方で大きな力を持ち、女性が「家庭の天使」として家庭の中で精神的な影響力を持っている状態が理想とされていた。しかし、それに対し、モンゴメリ作品の女性たちは、「おいしい食事」で家庭内を思うままにし、島の社会をも動かす政治力まで得ることができる。

モンゴメリの作品におけるプリンス・エドワード島は、その生活文化にイギリスの影響が色濃く見られる。しかし、階級が何よりも物を言うイギリス社会と違い、スーザンやジュディのような使用人の立場の人間が、その腕一本でのし上がり、上の階級の人間の評価も左右する力を与えられている。その小さな島の村社会を、女性が活躍する理想の社会として舞台にしている点が、モンゴメリ作品の特徴であり、革新的な点であると言える。

〔要約〕

カナダの女性作家、L.M. モンゴメリの作品群を対象にし、家庭において家事全般を受け持つ登場人物に与えられる権力について考察した。モンゴメリの作品では、男性が自分の農場で仕事をし、女性が組織化された地域社会で家庭を代表した社交関係を築くという、女性中心の村社会が主な舞台となっている。ここでは、都市の中産階級とは違う、独自のジェンダー役割と評価基準を見出すことができる。家庭内で料理をする人物の腕が、その家庭の評価を築き上げ、本人も使用人の立場でありながら地域社会で十分な尊敬を集めることができるのである。本稿では、長編シリーズに登場する使用人、ジュディ・プラムとスーザン・ベーカーに注目した。彼女たちは、女主人によって統括される家事使用人という立場であるが、実質的に家庭内を牛耳ることのできる権力を与えられている。家事の腕一本で階級をも超えた評価を得ることができるこの共同体の独自性について考察した。

引用文献

- 1) Salah, Christiana R.: A Ministry of Plum Puffs: Cooking as a Path to Spiritual Maturity in L.M. Montgomery's Anne Books, *100 YEARS OF ANNE WITH AN "E": THE CENTENNIAL STUDY OF ANNE OF GREEN GABLES*, Calgary: University

- of Calgary Press, 197, (2008)
- 2) Montgomery, L.M.: *Rainbow Valley*, NY: Harper-CollinsPublishers, 3 (1998)
 - 3) Montgomery, L.M.: *Anne of Ingleside*, Suffolk: PUFFIN BOOKS, 16 (1994)
 - 4) 前掲 2), 2
 - 5) Montgomery, L.M.: *Rilla of Ingleside*, NY: Harper-CollinsPublishers, 207 (1998)
 - 6) Montgomery, L.M.: *Pat of Silver Bush*, Canada: Random House, 270 (1988)
 - 7) Montgomery, L.M.: *Anne's House of Dreams*, Suffolk: PUFFIN BOOKS, 170 (1994)
 - 8) 横川寿美子：赤毛のアンの挑戦, 宝島社, 東京, 209 (1994)
 - 9) 菱田信彦：快読『赤毛のアン』, 彩流社, 東京, 172 (2014)
 - 10) Montgomery, L.M.: *The Annotated Anne of Green Gables*. Ed. Wendy E. Barry, Margaret Anne Doody and Mary E. Doody Jones, New York : Oxford University Press, 443, (1997)
 - 11) 前掲 3), 288
 - 12) Montgomery, L.M.: *Pat of Silver Bush*, Toronto: Seal Books, 255 (1988)
 - 13) 前掲 12), 6
 - 14) 前掲 2), 5